本願寺新報
hongwanji journal
8月10日(月曜日)
毎月1日・10日・20日発行
発行所　本願寺新報社
京都市下京区堀川通花屋町下ル　浄土真宗本願寺派（西本願寺）
〒600-8501　本願寺出版社内
電話 075(371)4171(代) ／ FAX075(341)7753

トップニュース

新型コロナが影響 地元で助け合い復旧へ

豪雨被災地・熊本を訪ねて

九州を中心に甚大な被害をもたらした令和2年7月豪雨。宗門内でも被害が広範にわたり、特に、球磨川など大小複数の川が氾濫した熊本県南部では、多くの門信徒や寺院が被災した。7月中旬、同県芦北町と人吉市を訪ね、現地の住職らに状況を聞いた。

（2面に関連記事）

「子どもの笑顔が救いに」
災害1週間後には園を再開

芦北町佐敷

八代海近くの芦北町佐敷地区は、7月3日から4日にかけての大雨で佐敷川が氾濫、川沿いに建つ明専寺も2㍍以上、浸水した。

7月18日、分部眞明住職(66)と家族が、ボランティアに訪れた知人らと片付けに追われていた。境内に積み上がった土砂や床下の泥はほぼ撤去されていた。分部住職は「災害直後から駆けつけてくれた教区内の若手僧侶や地元のボランティアのおかげで、ハード面はめどがついた」と安堵した表情で境内を見渡す。「あとはソフト面。こまごまとした片付けは時間がかかる。ここからが大変」と言葉を継いだ。

拭いても拭いても泥や砂が浮き出てくる縁側やフローリング。5つある納骨堂もすべて浸水し、流されたお骨も少なくない。

この日、納骨堂の泥出し作業の手伝いに来ていたのは、次女・映子さん(37)のバレーボール仲間。水俣市の福田房子さん(73)は「つらい思いをしている仲間のためにできるかぎりのことを」と、固く絞ったタオルで泥の付いた蝋燭立てや花瓶を丁寧に拭いていた。

分部住職は「固定電話が不通のままで携帯電話もつながりにくく、その上、感染症が気がかりで出かけていくこともためらわれる。ご門徒の安否を確かめることも、寺や納骨壇の様子を伝えることもできない現状が心苦しい」と語った。

◇

「この2週間、お互いの片付けの邪魔になると思って外に出られなかった。私もご近所の様子を知りたい」という分部住職の案内で近隣を歩いた。

佐敷川沿いに明専寺から数百㍍上流にある専妙寺を訪ねた。衆徒の澁谷暢達さん(38)が泥出し作業の手を止め、同寺の被害や、園長を務める淳光育児園の様子を語った。

育児園は、園舎の1階が浸水し、2階だけしか使えないが、災害の翌週から、子どもの心身の健康に細心の注意を払い、保育を再開させたという。澁谷さんは「子どもたちを預かることで親御さんも仕事や地域の復旧活動に出られるし、職員たちの生活も守れる。地域を生かす最後の砦という気持ち」と語り、「園舎を改築し、今年5月に竣工したばかりで私も大きく気落ちしたが、子どもたちの笑顔が救いになっている」と前を向いた。

◇

専妙寺を出て、隣接する白岩地区を訪ねた。この地区では明専寺の門徒宅4棟が裏山の土砂崩れで埋まった。犠牲者は出なかったが、避難先など詳細はつかめていないという。

「お盆参りの時はここのお宅でお茶をいただき、あのお宅ではたばこを一服して…というのがいつものコースだった。こんなことになるとは」と土砂に埋まったままの家々を見やった。

分部住職は「とにかく今は、ご門徒や地域の人の元気な声が聞きたい」と語った。

門前の土砂の撤去作業を見守る芦北町・明専寺の分部眞明住職

芦北町・専妙寺が運営する育児園は1階が床上浸水したが、災害1週間後からは被災を免れた2階で保育を再開。「子どもたちの笑顔に救われる」と語る澁谷暢達園長

「なんとか地元の人間で」
地元住職が支援情報を発信

球磨地域

災害直後からSNSで被災地の情報を発信し、人吉市など球磨地域で支援活動を続けている熊本県湯前町・明導寺の藤岡教顕住職(46)に同行し、7月19日、集落一帯が2㍍あまり浸水した人吉市下薩摩瀬町を訪ねた。

藤岡住職は、球磨川が氾濫した7月4日、門徒の安否確認のため、寺から人吉の市街地まで30㌔の道を車で走った。町で見たものは、2階まで茶色い水に浸かった建物や、途方に暮れた顔で泥にまみれた家財を運び出す人々の姿だった。ようやくたどり着いた高齢の門徒宅で、水浸しになった居間の片付けを手伝ったが、あまりにも大きな被害を前にして、「何もできなかった」と感じた。

藤岡住職は「とにかくこの状況を多くの人に知ってもらいたい」と、SNSのフェイスブックにスマートフォンで記録した動画とコメントを掲載。ボランティアや物資が不足している窮状を訴えた。翌日もその翌日も人吉市や地元の湯前町で、片付けを手伝いながら被災地の姿を発信。出会った人の言葉や、がれき集積場の混み具合、道路の迂回ルートなども丁寧に記した。

情報は日ごとに拡散していき、地元の友人や僧侶仲間、コーチを務めた龍谷大学柔道部の関係者、SNSで藤岡住職の活動を知った一般のボランティアからも、励ましや感謝の声、支援の申し出が相次いだ。

物資を被災した人に運ぶことを伝えると、水や食料、日用品や高圧洗浄機、土のう袋など、「ないものはないほど」の物資が同寺に寄せられ、家族総出で仕分けして被災地に届けた。

藤岡住職が重点的に支援に訪れているのが、下薩摩瀬町の村口和彦さん(65、人吉別院総代)宅。近隣には明導寺の門徒宅や村口さんが管理する借家も連なり、藤岡住職は連日、家族や友人とここに通い、村口さん宅やひとり暮らしの高齢者宅の片付けを手伝ってきた。この日も自身が監督を務める湯前町少年柔道クラブの保護者や地元の友人ら10人ほどで訪問。家から濡れた畳を運び出したり、壊れた家財や流木などを軽トラックで集積場まで何度も運んだ。

作業に加わった多良木町の簑田由希子さん(44)は「藤岡さんは高校の柔道部の先輩。コロナの影響で他県の人に頼ることが難しい状況なので、自分たちでなんとかするしかない。参加できる日にお手伝いさせてもらっている」。

村口さんは「ご住職のおかげでたくさんの方に助けていただいている。大変な目に遭ったが、『ご縁』に支えられていることを実感する」と感謝の思いを語った。

藤岡住職によると、人吉市では約3400世帯が被災したにも関わらず、新型ウイルスの影響で行政が募集するボランティアは1日200人。「圧倒的に人手が足りない」という。SNSには県外の知人からボランティアの問い合わせもあるが、応援依頼を見合わせざるを得ないのが現状だ。「その中でも、家族や地元の仲間、SNSを通じても多くの方がサポートしてくれている。今はなんとか地元の人間で踏ん張りたい。この地域は、お念仏を守り抜いた『かくれ念仏』の里。団結し、支え合う精神が染みついていますから」と力強く語った。

球磨川の氾濫で浸水した人吉市下薩摩瀬町。水に浸かった家財などを運び出す作業を黙々と続ける熊本県湯前町・明導寺の藤岡教顕住職㊨

藤岡教顕住職が発信するフェイスブック。「藤岡教顕」で検索